

パネルディスカッション「宗教2世支援—どうあるべきか」

当法人は2023年3月5日、「宗教2世支援—どうあるべきか」というパネルディスカッションを開催し、旧統一教会・エホバの証人・創価学会・その他の背景をもつパネリストと等身大でリアルな「宗教2世」への支援について考えました。その様子を4回のシリーズに分け紹介していきます。

<登壇者一覧>

| | | |
|-----------|-------|-------------------------|
| ファシリテーター: | 秋本弘毅 | 陽だまり 理事長 |
| パネラー: | 山本ゆかり | 日本脱カルト協会 理事 |
| | 菊池真理子 | 『「神様」のいる家で育ちました』 漫画家 |
| | 山本サエコ | 宗教2世問題ネットワーク 副代表・陽だまり会員 |
| | Pulmo | 旧統一教会 2世 |
| | 齋藤幸恵 | 陽だまり 理事 |
| | ちざわりん | 陽だまり 自助支援グループ |

第四回目：「等身大の支援と将来的な展望について」

——宗教2世といっても人によってけっこう違うし、宗教2世を支援するというよりは目の前にいるその人を支援するという形になると思うんですね。“宗教2世の〇〇さん”ではなく“〇〇さん”その人がたまたま宗教2世という属性があると見ていかなければいけないと思います。また“宗教2世”という呼び方によってある種のレッテルになってしまうことがあり、宗教2世だから社会には適合できないとか、落伍者の烙印みたいになったりとか、決めつけみたいになると、それはそれで問題だと思います。これから我々は宗教2世の支援が始まるわけですけど、どうしていったらいいか考えたいと思います。

ちざわりんさんはいかがでしょう？

ちざわりん：私自身は公認心理師をやらせていただいているんですけど、尊敬している先生の一人に信田さよ子先生がいらっしゃいます。「みんなの宗教2世問題」（横道誠 編著）という本の中で、信田さよ子先生も“宗教だから”じゃなくて、“何が困っているか？”というところに焦点を当てて、そういうところに山上容疑者が繋がれていればあんな事件は起きなかったんじゃないかという言葉がすごい刺さっています。

この問題は言葉の問題ですね。宗教2世というレッテルが貼られることによる烙印が押されるというところでもあります。

けれど宗教2世というのは、いろんな虐待のサバイバーでもありますし、機能不全家族の要素もありますし、いわゆるアダルトチルドレンの要素もあることがあります。宗教以外のところで虐待を受けたとか、生きづらさを感じている人たちとも連携をしながら、相対化を図ればいいんじゃないか。特別な社会問題じゃなくて、どこの家庭でも起こりうる問題だという方向に持って行って、その中

で私たち宗教虐待サバイバーの経験が行かされれば子どもの人権が守られる世の中になるんじゃないかなというのが、私の将来的な展望です。

—ありがとうございます。おっしゃるとおりですね。ちざわりんさんは公認心理師を持っていますので、これからぜひそういったことをお願いしたいと思います。

また宗教2世は日本だけの問題じゃなく国際的にも、英語圏でも、“宗教2世”という呼び方ではないらしいですけど、その辺りを詳しい山本ゆかりさんはいかがでしょうか。

山本ゆかり: 詳しいと言っていていかどうか判らないですけど、いくつかの団体について知っている範囲で話たく、いくつか海外の団体の写真などをお見せしたいと思います。

“SAFE PASSAGE FOUNDATION”

<https://safepassagefoundation.org/>

ここは“神の子供たち(Children of God)”という団体を脱会した2世が複数集まり、一生懸命頑張ってIT系の起業支援の会社を作って最初の基を作りました。社会の中に自分の居場所を作って自分自身の道を確認していくためのいろいろな支援を一からするというものです。

活動内容として、“緊急の資金援助”というのは、団体から脱会してきた当初に、協力者もなくお金もないときに緊急の資金が必要だったら、そこから支援しましょうというものです。

“Long-term advocacy”は、声を出せない2世たちのためにadvocate(弁護・代弁)して声を上げていく、またそれを長期的にやっいていこうというものです。

それから“scholarship”学費の支援です。

そして“Crisis Intervention”は、精神的、緊急的な支援が必要な人には外部の専門家を入れながらやっていく活動です。

同じ団体の脱会者が作った他のいくつかの団体が統合されたりしながらしっかり活動されています。“神の子供たち(Children of God)”以外のカルト団体の脱会した2世も受け入れているようです。

ジュリアナ・ビューリング(Juliana Buhring)も“神の子供たち(Children of God)”の中で育てられ、自分の体験を書いた本を兄弟と一緒に出したりしています。彼女も2世問題を表に出していく力になっています。彼女は資金集めも兼ねて自転車で世界一周に挑戦、ギネスホルダー(ギネス記録保持者)になりました。今は第一線から一歩引いたところで活躍されています。

<https://courier.jp/news/archives/53735/>

<http://julianabuhring.com/>

“神の子供たち(Children of God)”はアメリカで最初にカルト問題が大きくなった団体のひとつ。現在は名称が変更されて“ファミリー・インターナショナル”となり日本にも存在する。

“Holding Out Help”

<https://holdingouthelp.org/>

これはポリガミー(複婚)の団体の2世に特化しています。アメリカはポリガミーの団体が多いです。2世に限らず1世と一緒に出てくる2世も含めて支援しています。脱出したてで右も左も分からないところから、まず安心して息がでる場所を作るという支援など、けっこう長く活動を続けています。

アメリカでは約6~10万人のポリガミー人口がいてそこから気が付いて頑張っ出てくる人たちがいます。この団体は2世が作ったのではなくて、家族で出てきたある一家がとにかく行くところがなくて普通の家に「助けてください」と行った時に、そういう事態が自分の周囲にあるということに衝撃を受けた一般市民が無条件の信用を信条として設立して、その後2世たちが関わって今に至っています。最近彼らは家を一軒建てたんです。これは一時的に生活ができる場所で、サンクチュアリつまり心安らかに過ごせる場所ということです。

赤ちゃんを連れて人が脱会してきたとき、赤ちゃんのいろんなアイテムが緊急に必要です。例えば「ハイチェア、おむつが必要です」といったことを発信したり、服も皆から集めて生活をスタートするとか、そういう風にして外へ向けて支援を求めています。

それからメディア対応にとっても疲弊してしまう脱会者が出るんですね。あるコミュニティがひとつ摘発されるとその脱会者が集中的に(今の旧統一教会と同じなんですけど)報道に出ることがあります。頑張った人たちには「しばらくメディアから離れて静かにリゾート地などで休んでください」というプレゼントをしたりします。当事者同士は必要も解るのでそういう形のケアを提供されます。

“Child-Friendly Faith Project”

<https://childfriendlyfaith.org/>

これは教義の実践による児童虐待とネグレクトを終わらせる(活動で)、見過ごされて誤解されたりしてきた重要な問題についての啓蒙活動をする団体です。ここは当初ジャーナリストが作ってそこにイスラム系の人とかキリスト教、ユダヤ教、いろんな人が集まって活動していたのですが、残念ながら今はあまり活発ではない状態です。

日本だけじゃなく海外でも課題があると思っています。2世の支援の団体は他にもたくさんヨーロッパやカナダにあるのですが、正直言って5年は続くのですが、10年続くところはぐっと減って15年になるともっと少なくなっています。

紹介した2つ(“SAFE PASSAGE FOUNDATION” および “Holding Out Help”)は結構しっかりと長くやってきた支援団体です。資金を集めるのも地元の人ととても仲良くなって地元の中小の建築会社に一部無償でやってもらったり、地元の企業から寄付を受けたりしています。地元の学校の子どもたちにも問題を意識してもらい勉強してもらっています。例えばトイレトペーパーとか生活用品のパッケージのままの寄付などを「近所の人たちからどのくらいもらってこれるかな?」といったゲームを学校でやってもらう中で、子どもたちにも宗教が生

み出している問題を学校の勉強の中で学んでもらったりしています。またホームページやフェイスブックも活発に更新しています。広めていく方法はとても上手ですし、いくつかのアイディアは、日本でも（そのままは難しいですけど）使えるものはあると思っています。

——ありがとうございます。海外でも5年以上続けるのは意外に難しいんですね。

山本ゆかり： そうですね。ICSA(国際カルト研究学会)というところで、新団体ができたんだと知っても、3年4年5年と経ったときに調べたら無くなっているとか、ドメインが消えていたということは結構あってちょっとショックでした。たくさんできて良いと思うんですね。残っていくところや、統合されてしっかりしていくところがあればそれでいいのかなとも思っているのですが、何か参考になればという思いです。

——ありがとうございます。とても参考になりました。我々も逆に海外の事例になりお互いに参考にしあえれば良いと思います。

支援に関して Pulmo さんは将来的な展望などありますか？

Pulmo： 宗教2世に対する必要な支援というのは、虐待サバイバーが必要な支援であったり、シングルマザーが必要な支援であったり、アダルトチルドレンであったり、各種依存症の方が必要な支援であったりと被るところがかなり多いと思うんです。宗教2世というだけでも困難なのに、それ以外のマイノリティ性も抱えている人というのも少なくないと思うんです。宗教2世というひとつの 이슈 だけでは解決できないことがよくあり、例えば医療、福祉、行政、地域、就労支援、そういったところとどれだけコラボレーションしていけるだろうかとということがひとつの課題になるんじゃないかと思っています。

年齢も40、50代になってようやくカルトの被害を受けていたんだということで目が覚めたけど、自分がその宗教団体から出て、地縁も血縁もない社会に放り出されてそこからどうやって生きていけばいいかという方もいらっしゃるのですが、いろんな方の事情にフィットしている支援がいろんな角度からできるように、様々なマイノリティの方々や社会的弱者の方に手を差し伸べてきた人たちともコラボレーションが促進されていくといいなと思っています。

——そうですね。おっしゃるとおりですね。我々も支援するときによく複合問題だと言うんですね。ひとつひとつは既存のリソースで解決できるようになっているんですけど、それが複合的になるとけっこう難しくなってきますよね。この複合問題をひとつひとつ解決するのは、我々だけではたぶんできないと思うので専門家の方の助けは絶対必要だと思います。我々ができるのはハブ機能で、集積させて必要なところへ最適化させるのはできるんじゃないかと思っています。

この点、菊池さんはいかがでしょう？

菊池： はい、今のPulmoさんと秋本さんのお話を受けて、公認心理師であるちざわりんに質問したいのですが、宗教の問題というのは他のマイノリティの問題と比べて特殊な前提を知っている人が少ないということがあると思うのです。カウンセリングに行ったときに「私実は神の子です」と言ったときにどれくらいの人が通じるかという問題があると思うんです。その特殊性みたいなものをある程度知っていただけたら、今心理師の方が持っているテクニックなりスキルなりで対応できるものなのではないでしょうか？

ちざわりん： はい、いろいろ武器は揃ってきたと思っています。それぞれ菊池先生の本は学校の図書室に一冊ずつあってほしいと思っていますし、それ意外にも横道誠先生の本や荻上チキさんの調査とか、宗教2世問題とは何かというのが、心理師の方が読むと大体解るかと思います。

あと秋本理事長も言われていたとおり複合問題です。ひとつひとつの問題を分析していくと、今まで社会が対応してきた問題で、そういうところではリソースがあると思います。それで特殊性と言いますと、これは一般論の情報になりますが、“毒親の背景に毒コミュニティがある”という表現を横道誠先生がされていると思うんですけど、そういう特殊性というのが敢えて違いといいますか、今感じている部分です。やはり今までは宗教ということで避けられてきましたけど、昨年も国から通知が出て宗教だからと言って見逃すなども出てますし、救済新法が可決されましたけど、その裏で付帯決議の中で宗教で被害にあった人のカウンセリングなどを充実させましょうということも決議されています。

いろんなリソースが揃っている中で、あとは相談を受けやすい体制を作ることと、受け手側の備えという部分は国からも通知が出てますし、現場の方に備えていただければと思っています。これからそういったところも私たちの方で啓発していかなければいけないと思いますし、できれば公的なところ(例えば保健所とか)に宗教的虐待についての理解が広まって、保健所から支援団体や学校や地域に広がってもらえればな、と何となく私の方で考えております。

——心理職も体制としては整っているということですね。積極的に相互協力できるような体制にしていけたらいいですね。宗教2世問題って何か腫物を触るような、非常に難しい問題と思われがちなんですけど、そんなことはないと思うんですね。そんなにだれかじゃないとできないというものでもなくて、極端な話、宗教2世の方に「一番助かったのは何？」と聞くと「友達の言った何気ない一言」というのもあるんですね。我々としては一番何が良いのかをよく見てあげるのが重要なのかなという感じがします。

山本サエコさんはいかがですか？

山本サエコ： 私は最終的なゴールというのは人生を楽しく生きていけるかどうかだと思っています。自分がなぜ今楽しく生きているのかというと、人との出会いが自分には大きかったと思っています。先ほど少し出てきたと思いますが、宗教2世の支援として、組織を抜けて自己実現をしていくために、進学、入居、就職活動の支援というのが必要と思うんですけど、この3つは人との出会いなんですよ。進

学するとそこには大学の先生もいるし、大学のゼミの仲間に出会えたりします。入居するとご近所付き合いが始まります。就職すると社会に出て勉強になることがたくさんあるので、いかに良い人と繋がっていき、人生を楽しく盛り上げていけるかというところに着目して取り組んでいけたらなと思っています。

——とても重要なことをおっしゃっていて、実は宗教2世問題のうち大きな問題は孤立なんですね。やはり孤立すると本人が問題を抱えているのにだれも助けてくれない事態をなるべく避けてほしい。今後それを我々がやっていかなければならないと感じています。

齋藤さんはいかがですか？

齋藤： そうですね、楽しくと言われたのはすごく大事で、楽しくその人らしくというところで、それが宗教の影響を受けていようがまいが、他のだれでもないその人自身の強みを一緒に見つけていけるような支援ができればと思います。

あと一般の認識も親が何の宗教をしていようが子どもは必ずしもその属性を引き継ぐわけではないという共通理解があるといいですね。どうしても親が宗教していたら“あそこの家の子どもだから”という感じで思われたり、宗教から出たとしても“ああ宗教2世だから”と思われるなど、一般社会に出てもそういう見方をされるということも多いので、“親と子どもは別”というのを一般周知していければいいかなと思います。

——そうですね、結局宗教2世と言ってもたぶん普通の人なんですよね。宗教2世という状況に対してどのようなアプローチをしなければいけないのかということだと思います。それと同時に宗教2世というどうしてもネガティブな話題ばかりになってしまっていて、例えば「宗教2世だと一生マインドコントロールに苦しむ」とかいろんなことを言う人も居ますけど、それは望ましくないと私は思っています。20年間宗教2世という方を支援していますけど、そんな風になった人はいないですし、ずっと一生苦しむわけではないですし、支援するとだいたい半年から1年でかなり良い状況までもっていけるんですよね。そういったことは皆さんに知ってほしいし、宗教2世の方々を知っていただきたいんですよね。自分の抱えている辛い状況というのが、一生続くものではないと知ってほしいです。

また(宗教2世関係の)報道は助かってますしありがたいですが、片や報道を受けることにより傷口が開いてしまい、それで体調がおかしいという方々もいらっしゃいます。宗教2世の被害状況を報道してほしいというのはありますけど、それだけではなく希望になるようなこともぜひ(報道で)お伝えいただきたいと思っています。もちろん根拠のない楽観ではなく、上手くいっている人もいますし、解決不能な問題ではないということもぜひ伝えてほしいなと思っています。

大変貴重な意見で、特に当事者の方のご意見や海外の事例など、我々も教えてもらおうところがたくさんありました。本当に今日はどうもありがとうございました。